

研 究

保育施設における中学生受け入れ時の 安全に関する意識の検討

伊藤 優¹⁾, 鎌田 雅史²⁾

〔論文要旨〕

学校教育では異年齢との交流の重要性が強調されるようになり、園児とのふれあい体験学習として、多くの保育所や幼稚園で中学生や高校生を受け入れる機会が増加している。しかし、乳幼児と安全にふれあうための知識や技術、経験が乏しい中・高校生と園児が交流することで、想定外のリスクが発生する可能性が危惧される。

本研究は、中学校の家庭科授業において、乳幼児に対する生徒の関心を高め、関わり方を工夫する学習機会として強く奨励されている、ふれあい体験学習に焦点をあて、全国の保育者を対象に、ふれあい体験時における中学生の行動への危険意識、中学校でのふれあい体験前の事前指導などについて郵送法によって調査を実施し、806人からの回答を得た。その結果、保育者は中学校での事前指導において、中学生が挨拶やマナーなどの基本的な態度を身につけることを求めている。また、特に3歳未満クラスや異年齢混合クラスにおいて、ふれあい体験時の中学生の行動に含まれるハザードを警戒していることが示され、担当クラスの子どもたちの発達段階に即して、保育者の危険意識の程度に差が生じることが認められた。つまり、乳幼児に接することに不慣れな学外者を保育所・幼稚園に受け入れる際、安全確保のため、保育所・幼稚園と中学校の間における事前の情報交換や、受け入れクラスの特性に応じた配慮が必要であることが示唆された。

Key words : 安全意識, 保育施設, 事故予防, 乳幼児, ふれあい体験

I. はじめに

近年、異年齢の子どもが関わる機会が減少している¹⁾。それに伴い、学校教育においては異年齢集団による交流の推進が求められるようになり、中学生や高校生が幼稚園や保育所を訪ね、乳幼児とふれあう取り組みが多く行われている。このような取り組みの有効性は、中学生・高校生と乳幼児の双方に認められることが報告されており^{2~4)}、異なる発達段階にある子どもたちが関わることの利点について理論的にも精緻化されてきている⁵⁾。平成29年度告示の幼稚園教育要領や保育所保育指針においても、地域の関係機関等との

積極的な連携や協働を図ることが示されており、次世代の子育て世代育成のためにも今後ますます必要と becoming 活動と考えられる。

一方で、乳幼児と安全に関わるための知識や経験の少ない中学生や高校生を受け入れる機会が多くなっている幼稚園や保育所では、これまでの保育の枠組みからは保育者にも予測することが難しいような危険な状況が懸念され、実態把握と対策の重要性が指摘されている⁶⁾。掛札⁷⁾は、人の心身の安全に悪影響を与える可能性のある潜在的な危険性をハザードと呼び、そのハザードによって被害が起こる確率と、想定される被害の深刻さを組み合わせた概念と

Survey on the Safety Awareness of Preschool Teachers
When Children Come into Contact with Junior High School Students
Yu ITO, Masafumi KAMADA

[3158]

受付 19. 7. 8

採用 20. 4. 28

1) 島根大学 (研究職)

2) 就実短期大学 (研究職)

してリスクを定義している。これに従うならば、乳幼児が中学生や高校生と関わる場合には、保育者と関わる場合よりも大きなリスクが生じると推察される。なぜならば、園での通常の保育におけるリスクに加え、乳幼児と関わることに不慣れな中学生や高校生自身が通常の保育では生じにくいハザードを生起させ、保育者にとって意図しないリスクを誘発する可能性が示唆されるからである。

幼稚園・保育所は、中学生・高校生を受け入れる際、充実した活動になるように考慮するとともに、活動の安全性にも配慮する必要がある。実際には、中学生・高校生の乳幼児とのふれあい体験は、それぞれの保育所や幼稚園が実情に応じて個別に受け入れ、実施されている。そのため、保育者が園個別の特徴や、中学生や高校生が乳幼児とふれあうことに伴うリスクに関する安全意識をどの程度有しているかによって、実施時の安全確保のための手立ては異なっているのが現状である。しかし、園固有の文脈を超えて共通する保育者の安全意識やそれに関連する諸要因を検討し、ふれあい体験の全体像を捉えようとするような先行知見は十分に蓄積されていない。また、子どもの発達に伴って、想定される危険性や保育内容、保育上の留意事項は変化するが⁸⁾、ふれあい体験時、子どもの発達に即して、保育者がふれあい体験を行うにあたってどのような要望を有しているのかや保育者の安全に関する意識を体系的に示した実証的知見もほとんどみられない。

本研究では特に、乳幼児への関心を高め、関わり方を工夫するという学習目標の達成のため、生徒に乳幼児とのふれあい体験の機会を与えることを強く推奨⁹⁾している中学校家庭科に焦点をあてる。そして、ふれあい体験を受け入れている保育所・幼稚園の保育者を対象に全国調査を行い、活動時の安全性を確保するために中学校に求める事前指導の内容や、ふれあい体験時における中学生の行動にどの程度危険を感じるか（以下、危険意識）について調査する。さらに、担当クラスの子どもたちの発達段階に即して、保育者の危険意識の程度に差が認められるかどうかについても検討する。なお、危険意識に関する感受性は、保育者の経験知によって変化する可能性が指摘されている

ことから⁹⁾、保育者の経験年数についても併せて検討を行う。

II. 方 法

1. 調査方法

2018年10月に、各都道府県の私立幼稚園協会、保育所連盟に、中学生のふれあい体験を受け入れている保育所・幼稚園の推薦を依頼し、2018年11～12月に推薦された園に対し質問紙を郵送し、各5人の保育者に回答を依頼した。192園から協力が得られ、有効回収率は71.5% (806人)であり、有効回答率は97.0% (782人)であった。調査協力者の内訳は、幼稚園252人、保育所294人、認定こども園234人、不明2人、無記名24人であった。保育者の経験年数の平均（標準偏差）値は14.8年（ $SD = 9.83$ ）であった。

2. 調査内容

調査協力者に対し、性別、担当クラスの年齢、保育者としての経験年数等の属性に加え、①中学校家庭科における乳幼児とのふれあい体験時の危険防止に関する事前指導についての要望（12項目）、②中学生と乳幼児とのふれあい体験時における危険意識（12項目）について尋ねた。事前指導への要望については「それほど学習しなくてよい」を1とし、「必ず学習してほしい」を5とする5段階評定によって、危険意識については「まったく危険ではない」を1とし、「とても危険だ」を5とする5段階評定によって回答を求めた。調査項目は、伊藤ら⁶⁾による中学校家庭科教師を対象とした乳幼児とのふれあい体験における危機意識調査、保育者養成校における実習のガイドラインに関する研究^{10,11)}を基盤とし、保育者養成校に在籍する2名の研究者により、本研究の目的に準じた場合の項目内容の妥当性や表現のわかりやすさ、項目数が過度にならないことに留意しながら合議のうえで作成した。作成された項目は、さらに、ふれあい体験を実施している現職の家庭科教員1名と保育者2名に内容の適切さと不足している事項がないかを確認依頼し、修正を加えたものを使用した。

⁸⁾中学校学習指導要領の技術・家庭の家庭分野では、中学生が幼児とふれあうなどの活動を通して幼児への関心を高め、関わり方を工夫する学習が必修となっており、幼稚園や保育所などで幼児とのふれあいができるように留意することが明記されている（文部科学省、2017）。

表1 事前指導に関する因子分析結果および各項目の記述統計量

項目	Factor1	Factor2	有効 <i>n</i>	平均値	標準偏差
Factor1 保育技術 ($\alpha = .90$)					
乳幼児の遊び (遊びの種類や遊び方) について	.93	-.12	773	3.08	1.05
乳幼児に合ったおもちゃの作製について	.92	-.20	775	2.72	1.12
乳幼児の発達の特徴について	.86	.02	777	3.04	1.07
子育てに関わる地域の取り組みについて	.80	.00	775	2.23	0.94
幼稚園や保育所の一日の生活について	.75	.15	778	2.74	1.02
乳幼児とのふれあい方 (声のかけ方など) について	.60	.26	777	3.55	1.08
緊急時 (幼児のけが, 地震など) の対応について	.50	.29	775	3.40	1.16
Factor2 基本的態度 ($\alpha = .83$)					
清潔にするなどの衛生面について	-.18	.92	771	3.84	1.08
乳幼児とのふれあい体験時の服装について	-.14	.89	778	3.60	1.13
挨拶や言葉遣いなどの基本的なマナー	-.09	.80	779	4.27	0.93
意欲や積極性などふれあい体験に対する基本的な姿勢	.16	.76	777	3.96	0.98
清掃や食事の仕方などの基本的な生活技術	.16	.64	779	3.66	1.07
因子間相関	Factor1	1.00			
	Factor2	.57			
			Factor2	1.00	

欠損データについてペアワイズ除去の手続きを取ったため, 有効 *n* の値が因子分析と記述統計量で異なっている。

3. 分析方法

欠損データに関しては, 各分析においてペアワイズ削除の処理を行った。分析には HAD (Ver.16)¹²⁾ を使用した。

4. 倫理的配慮

本研究は, 匿名の質問紙調査であり, 各園および保育者の研究協力は任意である。いかなる利益相反もなく, 謝礼等の誘因も存在しない。インフォームドコンセントの手続きとして, まずは全国各地の私立幼稚園協会, 保育所連盟に書面にて研究の目的および概要を説明し, 協力依頼を行った。その際, 本研究におけるプライバシーガイドラインを示し, 研究協力が同意が得られる場合において, 中学校家庭科におけるふれあい体験を受け入れている園の推薦を依頼した。

推薦された園には, 個別に質問紙を5部配布し, それぞれの園で, 保育者への配布依頼を行った。質問紙の鏡文には, 研究目的や概要, 本研究が匿名の質問紙であり, 個人情報特定されない形で回答を保管, 統計的処理を行う旨や, 調査への協力は任意である旨を記載しており, 調査への回答をもって協力への同意が得られたと判断する旨を記載している。

回答された質問紙は, 専用封筒に個別に厳封された状態で, 返送していただくよう依頼した。本研究は郵送法に基づくが, 質問紙には, 研究代表者の所在が記載されており, 問い合わせに対しては十分に説明を行

い, 応諾が得られた場合に調査協力を依頼している。

III. 結 果

1. 記述統計量および因子分析

i. 事前指導への要望に関する項目

ふれあい体験時における事故防止のために, 保育者が中学校の家庭科授業での事前指導についてどのような要望を有しているか検討するため, 探索的因子分析を実施した (表1)。

因子数については固有値1を基準として因子数を提案するカイザー基準のみならず, 堀¹³⁾に準拠し, スクリーテストにおける, 最小平均偏差相関 (MAP) の値が最小になる因子構造を提案する方法, サンプルと同サイズの乱数を発生させ固有値を求め, データの固有値が乱数相関行列の固有値の値よりも大きくなる因子数を提案する平行分析の結果を参考にしながら, 因子の内容を理論的かつ簡潔に解釈可能で各因子に一定数 (本研究においては3項目) 以上の項目が負荷する構造を採用した。

欠損データを除く771人の保育士, 幼稚園教諭, 保育教諭から得られた12項目の回答に基づき, 主成分法に基づくスクリーテストを行った結果, 固有値の変化量は, 5.90, 1.61, 0.97であり, 乱数相関行列の固有値の変化量は1.21, 1.16, 1.12であった。よって, カイザー基準と平行分析は2因子構造を提案した。また MAP の値も, 1因子構造から順に .05, .04, .04であり2因

表2 危険意識に関する因子分析結果および各項目の記述統計量

項目	Factor1	Factor2	有効 <i>n</i>	平均値	標準偏差
Factor1 乱暴な関わり ($\alpha = .81$)					
中学生が幼児の手を急に引っ張る	.94	-.05	775	4.92	0.32
中学生が幼児と衝突する	.88	-.04	776	4.89	0.37
中学生が抱っこしていた乳幼児を落としそうになる	.77	-.04	776	4.94	0.28
中学生に押され, 幼児が物にぶつかる	.74	.11	776	4.94	0.29
中学生がドアを乱暴に閉める	.72	.07	776	4.91	0.35
幼児がブランコや回る遊具などで遊ぶとき, スピードを出して押したり回したりする	.39	.36	774	4.88	0.39
Factor2 配慮の欠如 ($\alpha = .75$)					
中学生が乳幼児とのふれあい時に手を洗わない	-.15	.74	768	3.99	0.95
乳幼児とのふれあい時, 中学生が大きな声を出す	.08	.67	767	3.74	0.94
中学生が乳幼児とのふれあい時, アクセサリー等を身につけている	.01	.65	773	4.83	0.45
乳幼児向けに中学生が作製したおもちゃに小さいパーツが入っている	.09	.65	775	4.47	0.79
中学生が幼児を追いかけて走る	.12	.53	768	3.59	1.07
乱暴な言葉がけをする	.23	.45	772	4.49	0.71
因子間相関	Factor1	1.00	.72		
	Factor2		1.00		

欠損データについてペアワイズ除去の手続きを取ったため, 有効 *n* の値が因子分析と記述統計量で異なっている。

子構造を提案した。以上の結果により2因子構造での解釈が妥当であると判断した。続いて2因子構造を固定し, 重みつき最小二乗法に基づくカテゴリカル因子分析 (Promax 回転) を実施した。表1に保育者が中学校の家庭科授業での事前指導に要望することを因子分析した結果を示す。

表1から, 第一因子は, 乳幼児の遊び (遊びの種類や遊び方), 乳幼児に合ったおもちゃの作製, 乳幼児期の発達の特徴など, 子どもと接する方法や知識の習得に関する7項目が属していたことから, 「保育技術」と命名した。第二因子は, 清潔にするなどの衛生面, ふれあい体験時の服装, 挨拶や言葉遣いなどの基本的なマナーなど, 保育における基本的な気遣いや態度に関する5項目が属していたことから, 「基本的態度」と命名した。クロンバックの α 係数は, 第一因子で $\alpha = .90$, 第二因子では $\alpha = .83$ であり, 十分な内的整合性を示した。後の分析では, 各下位因子に属する項目の平均値を算出した尺度得点を用いた。

ii. 危険意識に関する項目

ふれあい体験時に想定される中学生の行動にどの程度危険を感じるかについて, 保育者がどのような視点で捉え, どの程度危険と認識しているのかについて検討する目的で, 上記と同様の手続きによる探索的因子分析を行った。747人から得られた12項目の

回答に基づき, 主成分法に基づくスクリーテストを行った結果, 固有値の変化量は, 4.39, 1.48, 0.91であり, 乱数相関行列の固有値の変化量は1.22, 1.16, 1.11であった。よって, カイザー基準と平行分析は2因子構造を提案した。また *MAP* の値も, 1因子構造から順に .03, .02, .04 であり2因子構造を提案した。以上の結果から2因子構造での解釈が妥当であると判断した。続いて, 2因子構造を仮定し, 重みつき最小二乗法に基づくカテゴリカル因子分析 (Promax 回転) を実施した (表2)。

第一因子は, 中学生が幼児の手を急に引っ張る, 幼児と衝突する, 抱っこしていた乳幼児を落としそうになるなど中学生との直接的なコミュニケーションにおいて想定されるハザードに関する6項目が属していたことから, 「乱暴な関わり」と命名した。第二因子は, 中学生が乳幼児とのふれあい時に手を洗わない, 大きな声を出す, アクセサリー等を身につけているなど, 比較の間接的で子どもの安全に対する気配りの欠如に関するハザードの6項目が属していたことから, 「配慮の欠如」と命名した。クロンバックの α 係数は, 第一因子では $\alpha = .81$, 第二因子では $\alpha = .75$ であり, ある程度の内的整合性を示した。後の分析では, 各下位因子に属する項目の平均値を算出した尺度得点を用いた。

表3 尺度得点の記述統計量および相関行列

	有効 <i>n</i>	平均値	標準偏差	保育技術	基本的態度	乱暴な関わり	配慮の欠如	経験年数
保育技術	756	2.97	0.83	1.00				
基本的態度	769	3.87	0.81	.58**	1.00			
乱暴な関わり	773	4.91	0.24	.29**	.37**	1.00		
配慮の欠如	749	4.19	0.55	.31**	.38**	.57**	1.00	
経験年数	749	14.84	9.83	-.03	-.01	.13**	.15**	1.00
担当クラス (ダミー変数)								
3歳未満	—	—	—	.00	.00	.06	.09*	.03
3歳以上	—	—	—	-.01	-.02	-.09*	-.16**	-.41**
混合クラス	—	—	—	.01	.03	.05	.10**	.43**

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

欠損データについてペアワイズ除去の手続きを取ったため、有効 *n* の値が相関分析と記述統計量で異なっている。

iii. 尺度得点の記述統計量および相関行列

因子分析に基づく尺度得点の記述統計量および、調査協力者の担当するクラスの年齢、保育者としての経験年数との相関行列を表3に示す。なお、子どもたちの年齢については、異年齢混合クラスも含まれるため、3歳未満クラス、3歳以上クラス、混合クラスの3つのカテゴリーに分類し、ダミー変数を作成することで相関値を算出している。

第一に、事前指導（「保育技術」、「基本的態度」と危険意識（「乱暴な関わり」、「配慮の欠如」）に関する下位尺度の間には、すべての関係において有意な正の相関がみられ ($r_s = .29 - .58$)、安全のために事前指導を要望している保育者の危険意識は高かった。第二に、保育者の経験年数と「乱暴な関わり」($r = .13$, $p < .01$)、「配慮の欠如」($r = .15$, $p < .01$)の間に弱い正の相関が認められ、経験年数が多い保育者の危険意識が高い傾向があることが示唆された。また、事前指導に対する要望については、経験年数との関連が認められなかった。第三に、3歳以上クラスと危険認知の間に弱い負の相関が認められたのに対し（「乱暴な関わり」 $r = -.09$, $p < .05$ 、「配慮の欠如」 $r = -.16$, $p < .01$ ）、「配慮の欠如」に関し3歳未満クラス($r = .09$, $p < .05$)と混合クラス($r = .10$, $p < .01$)においては弱い正の相関が認められた。以上の結果より、クラスを比較した場合、3歳未満クラスや混合クラス担当の保育者は中学生の行動のハザードを知覚しやすい可能性が示唆された。

しかし、本調査における回答者の属性について、経験豊かな教員の多くが混合クラスを担当していることから ($r = .43$, $p < .001$)、危険意識と担当クラスとの相関関係に、経験年数が交絡していないか検討する

必要が認められた。そこで後の分析ではそれぞれを独立変数として要因計画に組み込んだ分散分析を実施し、より詳細に経験年数、担当クラスと事前指導への要望および危険意識との関係について検討する。

2. ふれあい体験での事前指導への要望

まず、分散分析モデルに保育者の経験年数を組み入れるために、経験年数の中央値 $Med = 15$ 、および平均値 $M = 14.84$ を基準に、15年未満と15年以上の保育者に2値化したカテゴリー変数を作成した。また、担当クラスについては、3歳未満、3歳以上、混合クラスに分類し、カテゴリー化した。

事前指導への要望の強さに関し、事前指導の内容（保育技術、基本的態度）、保育者の経験年数（15年未満、15年以上）、担当クラスの年齢（3歳未満、3歳以上、混合クラス）の間に差が認められるかを検討するために、以下の分散分析を実施した。

分散分析においては、従属変数である事前指導に関する要望の大きさ（尺度得点の値）について、先の因子分析に基づく「保育技術」と、「基本的態度」のカテゴリー間に差が認められるかどうか検討するため、事前指導の内容に関するカテゴリーを対応のある要因としてモデルに投入した。また、本研究の目的である、担当クラスの発達段階や、保育者の経験年数による要望の違いを検討するために、担当クラスの年齢および、保育者の経験年数を被験者間要因としてモデルに投入した。よって、従属変数は、調査協力者の事前指導への要望に関する尺度得点であり、独立変数は、被験者内要因である事前指導の内容（「保育技術」、「基本的態度」）、および被験者間要因である保育者の経験年数（15年未満、15年以上）、担当クラスの年齢（3歳未満、

表4 水準ごとの事前指導への要望得点に関する記述統計

担当クラスの年齢	事前指導の内容	経験年数					
		経験年数15年未満			経験年数15年以上		
		人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差
3歳未満	保育技術	64	3.14	0.78	78	2.90	0.83
	基本的態度	64	3.91	0.64	78	3.87	0.79
3歳以上	保育技術	263	2.99	0.80	105	2.98	0.84
	基本的態度	263	3.84	0.79	105	3.87	0.83
混合	保育技術	48	2.97	0.86	134	3.00	0.91
	基本的態度	48	3.98	0.75	134	3.87	0.84

各セルには、事前指導への要望に関する尺度得点に関する記述統計を記載。

表5 事前指導の要望得点を従属変数とした分散分析の結果

	<i>F</i> (<i>df</i>)	<i>p</i> 値	偏 η^2
主効果			
経験年数	<i>F</i> (1,686) =0.80	.37	.00
担当クラスの年齢	<i>F</i> (2,686) =0.13	.88	.00
事前指導の内容	<i>F</i> (1,686) =751.70	.00**	.52
交互作用			
経験年数 * 担当クラスの年齢	<i>F</i> (2,686) =0.48	.62	.00
経験年数 * 事前指導の内容	<i>F</i> (1,686) =0.28	.60	.00
担当クラスの年齢 * 事前指導の内容	<i>F</i> (2,686) =0.47	.62	.00
二次の交互作用			
経験年数 * 担当クラスの年齢 * 事前指導の内容	<i>F</i> (2,686) =1.98	.14	.01

表6 水準ごとの危険意識への要望得点に関する記述統計

担当クラスの年齢	事前指導の内容	経験年数					
		経験年数15年未満			経験年数15年以上		
		人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差
3歳未満	乱暴な関わり	65	4.93	0.15	78	4.95	0.13
	配慮の欠如	65	4.24	0.45	78	4.29	0.49
3歳以上	乱暴な関わり	270	4.87	0.34	104	4.94	0.14
	配慮の欠如	270	4.02	0.62	104	4.25	0.48
混合	乱暴な関わり	49	4.89	0.26	129	4.94	0.15
	配慮の欠如	49	4.21	0.57	129	4.30	0.53

各セルには、中学生の行動に対する危険意識の尺度得点に関する記述統計を記載。

3歳以上、混合クラス)とした、3要因混合計画(2×2×3)に基づく分散分析を実施した。各要因における水準ごとの記述統計量を表4に示す。

分散分析の結果(表5)、指導内容の主効果のみ有意であり($F(1,686) = 751.70, p < .01, \text{偏} \eta^2 = .52$)、「基本的態度」の事前指導($M = 3.89, 95\%CI[3.87, 3.96]$)が、「保育技術」の事前指導($M = 3.00, 95\%CI[2.92, 3.07]$)よりも得点が高かった。また、本分析においては、保育者の経験年数による要望の違いや、担当クラスの年齢間の差異、およびその交互作用については認められなかった。

以上より、乳幼児の安全を守るために、保育者は、

技術的な側面よりもふれあい体験におけるマナーや態度などの基本的事項に関する事前指導を求めていることが示された。

3. 保育者のふれあい体験時の危険意識

危険意識に関しても、同様の3要因混合計画(2×2×3)の分散分析を行った。中学生の行動に対する危険意識に関する尺度得点を従属変数とし、独立変数は、被験者内要因である中学生の行動内容(「乱暴な関わり」、「配慮の欠如」)、および被験者間要因である保育者の経験年数(15年未満、15年以上)、担当クラスの年齢(3歳未満、3歳以上、混合クラス)とした、

表7 危険意識を従属変数とした分散分析の結果

	<i>F</i> (<i>df</i>)	<i>p</i> 値	偏 η^2
主効果			
経験年数	<i>F</i> (1,689) =7.76	.01**	.01
担当クラスの年齢	<i>F</i> (2,689) =3.29	.04*	.01
中学生の行動	<i>F</i> (1,689) =1086.99	.00**	.61
交互作用			
経験年数 * 担当クラスの年齢	<i>F</i> (2,689) =1.35	.26	.00
経験年数 * 中学生の行動	<i>F</i> (1,689) =3.14	.08+	.00
担当クラスの年齢 * 中学生の行動	<i>F</i> (2,689) =3.25	.04*	.01
二次の交互作用			
経験年数 * 担当クラスの年齢 * 中学生の行動	<i>F</i> (2,689) =1.17	.31	.00

3要因混合計画(2×2×3)に基づく分散分析を実施した。各要因における水準ごとの記述統計量を表6に示す。

分散分析の結果(表7)、第一に、効果量は小さいながらも中学生の行動内容と危険意識との交互作用が有意であった($F(2,689) = 3.25, p = .04$, 偏 $\eta^2 = .01$)ため、単純主効果の検定を行った結果、中学生の行動内容に関し乱暴な関わりについてはクラス間の単純主効果は認められなかった一方で($F(4,1378) = 0.30, p = .74$), 配慮の欠如については担当クラス間の単純主効果が認められた($F(1,1378) = 6.25, p < .01$)。

そこで、配慮の欠如に関し、修正 Shaffer 法による多重比較を行った結果、3歳未満クラスおよび混合クラスの担当をしている保育者と、3歳以上クラスを担当している保育者との間に5%水準の有意差が認められた(図)。危険意識は、3歳未満クラスの得点が最も高く($M = 4.27, 95\%CI [4.20, 4.34]$), 次いで混合クラスの得点が高く($M = 4.26, 95\%CI [4.19, 4.33]$), 3歳以上クラスの得点が最も低かった($M = 4.14, 95\%CI [4.10, 4.19]$)。

第二に、経験年数($F(1,689) = 7.76, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .01$), 担当クラスの年齢の主効果($F(1,689) = 3.29, p = .04$, 偏 $\eta^2 = .01$)について、効果量は小さいものの有意差が認められた(表7)。経験年数については、15年以上の保育者($M = 4.61, 95\%CI [4.57, 4.65]$)は、15年未満の保育者($M = 4.53, 95\%CI [4.48, 4.57]$)よりも危険意識が高かった。担当クラスに関し、修正 Shaffer 法に基づく多重比較を行った結果、3歳未満クラスの危険意識($M = 4.60, 95\%CI [4.54, 4.66]$)は、3歳以上クラス($M = 4.52, 95\%CI [4.48, 4.56]$)よりも有意に高かったが、混合クラス($M = 4.59, 95\%CI [4.53, 4.64]$)との間には差が認められなかつ

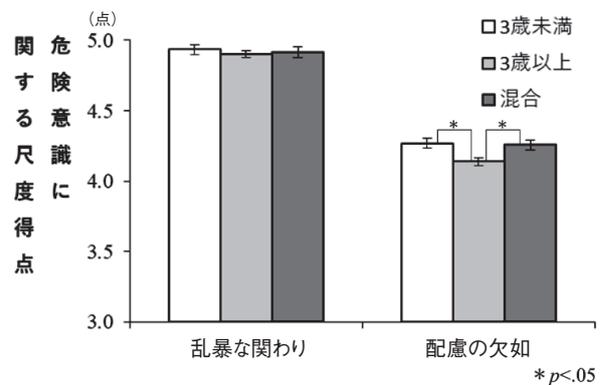


図 乱暴な関わりと配慮の欠如に関する担当クラス間の危険意識の比較

た。さらに中学生の行動については、有意な主効果が認められ($F(1,689) = 1086.99, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .61$), 「乱暴な関わり」($M = 4.91, 95\%CI [4.90, 4.94]$)が、「配慮の欠如」($M = 4.22, 95\%CI [4.17, 4.27]$)よりも危険と認識されていた。

以上の結果から、「配慮の欠如」に関して、ほとんどの保育者が危険性を認識しているものの、その程度については担当クラス間で違いが認められ、3歳未満クラスや混合クラスを担当する保育者は、3歳以上クラスを担当する保育者よりも危険と判断する可能性が示唆された。また、全般的に「乱暴な行動」に関する危険意識は、経験年数や担当クラスに関係なく、どの保育者も強く警戒していることが示された。更に、経験年数が多い保育者や3歳未満クラス・異年齢児混合クラス担当の保育者は、中学生の行動を全体的により危険であると認識している可能性が示唆された。

IV. ま と め

本研究では、中学校の家庭科授業で実践されている中学生と乳幼児とのふれあい体験を受け入れている保育所・幼稚園などに勤務する保育者を対象とし

た郵送法による全国調査を実施し、保育者の求める事前指導内容および、ふれあい体験時の危険意識について検討した。

第一に、探索的因子分析により、ふれあい体験に関する事前指導について、乳幼児の危険を回避するため、乳幼児の理解と関わり方についての「保育技術」と、ふれあい体験を行ううえでの挨拶やマナーなど「基本的態度」に関する2つの視点から要望していることが示された。そして特に、分散分析において「保育技術」と「基本的態度」に関する事前指導の要望得点の間に差が認められ、平均値は「4：積極的に学習してほしい (95%CI [3.87, 3.96])」の付近に分布していることから、保育者は担当するクラスの子どもたちの年齢や、経験年数にかかわらず、「基本的態度」に関する事前指導を家庭科教員に求めていると推察される。この点は、保育者養成校による実習指導を対象とした増田¹⁰⁾や、澤津ら¹¹⁾の結果とも一致する。保育施設側は、ふれあい体験に限らず、学外者を園に招き入れる際は、基本的マナーや衛生面や身なり等に関する、園で生活するにあたって求められる基本的な態度を強く求めているといえる。スムーズに外部者を招き入れ、乳幼児とのふれあい時における安全を確保するためにも、年長者である学外者が基本的なマナーや自覚的態度をもって、園の子どもたちとふれあうように心がけてほしいという意識は、確実に共有できるよう、地域の学校等の訪問希望機関に対して積極的に求めていくことが望まれるだろう。

次に、乳幼児とのふれあい体験中における危険意識については、探索的因子分析により、中学生が乳幼児と接する際に、少なくとも「乱暴な関わり」や「配慮の欠如」という2つの視点から捉えていることが認められた。なお、これらの因子構造については、平行分析やMAPの値、スクリープロットに基づき決定したが、「乱暴な関わり」と「配慮の欠如」の因子間相関係数は、 $r = .72$ であり強い正の相関が認められたことから、2つの尺度の弁別性については、将来的に検証することが求められる。

しかしながら、分散分析においては、中学生の行動内容の主効果が有意であり、保育者は全般的に、直接的に中学生と子どもたちが関わる時の「乱暴な関わり」を特に警戒していることが示された。「乱暴な関わり」に関する危険意識の平均値は、「5：とても危険だ (95%CI [4.90, 4.94])」付近に分布し天井効果

が認められることから、受け入れ先のクラスや保育者の特徴にかかわらず事前の丁寧な指導が求められる。

また、「配慮の欠如」に関しては、効果量は小さいながらも、担当クラスの間で危険意識に差が認められた。3歳以上クラスと比較すると、3歳未満クラスや混合クラスの得点が高かった。その理由として、3歳未満クラスにおいては、子どもが未発達であることから誤飲や衛生面に関する重大な事故により留意する必要があることや、さまざまな年齢の乳幼児がいる混合クラスでは、全体の動きを見て年齢の小さな子どもの安全に配慮した関わりを展開することがより求められることが考えられる。保育者は乳幼児の発達の特性や安全に関する留意点について、事前に中学校と丁寧な情報交換を行い、中学校に対して中学生の自覚的な行動を促すように求めていく必要性が示唆される。

本研究で得られた知見のうち、特に保育者の担当クラスや経験年数に関連して検出された効果量は全体的にかなり小さい。しかし標本平均の間に、微弱ながらも有意な差が検出できたことは、将来的な実証研究の布石となるだろう。本研究において、危険意識に関する項目の効果量が小さかった理由の一つとして、測定尺度の精度が考えられる。本研究では、事前指導の内容や危険意識を、5件法リッカート尺度により尋ねたが、全体として記述統計量は正の方向に偏り、特に「乱暴な関わり」には天井効果が認められた。本研究における測定尺度において、保育者の得点は高く、その中での保育者間の危険意識の差を十分に識別することが困難であったために、本調査で得られた相関関係が母数の関係よりも希薄化した可能性が否めない。

この点については是正するためには、例えば保育者の全般的な危険意識が高いことを前提としたうえで、保育者間の意識差を検出可能な測定上の工夫（例えば、7件法の単極性尺度にし、アンカーとなる形容詞を工夫するなど）や、項目反応理論のテスト情報関数に基づき意識の高い保育者の判別に有効な項目を選定した尺度開発などを検討し、本研究結果を追試する必要性が求められる。

さらに、保育者が過去にふれあい体験を受け入れた際の経験や、園としての受け入れ体制の在り方、派遣先である中学校との意思疎通の程度、園が日常的にリスク・マネジメントに対してどの程度取り組んでいるかどうかなどの諸要因は、ふれあい体験受け入れ時に

おける保育者の危険意識に関連すると考えられる。本研究では、中学校との関係性や、日常的な園での取り組み等の文脈的要因は、本研究では十分に検討できなかった変数であり、将来的な検証が必要であると考えられる。

本研究では、中学生の家庭科におけるふれあい体験に焦点化し、ふれあい体験時の保育者の事前指導への要望や危険意識について検討した。中学生に限らず、乳幼児との関わりに不慣れな訪問者を園に招く際、訪問希望機関における事前学習および園と訪問希望機関との事前打ち合わせを充実させることが必要となる。その際には、訪問希望機関や訪問者に対して、交流する園の子どもたちの安全確保にポイントを絞った情報交換や、受け入れクラスの保育者との安全意識の共有を図ることが求められる。

最後に今後の課題について示す。本研究では、ふれあい体験における保育者の危険意識は詳細に検討したものの、危険回避のための手立てについては検討できていない。今後は、ふれあい体験での危険を回避する事前学習や打ち合わせ内容、保育者の声かけ等を検討する必要があるだろう。

謝 辞

本研究の質問紙調査にご承認いただきました私立幼稚園連盟、私立保育園連盟、私立認定子ども園連盟の皆様、各幼稚園・保育所の園長先生をはじめとした先生方に深く感謝申し上げます。

また、本調査は平成30年度日教弘本部奨励金を得て調査し、まとめたものです。

付 記

本研究は日本保育学会第72回大会（2019年5月）と第66回日本小児保健協会学術集会（2019年6月）において発表した内容を再検討し、加筆修正を行ったものである。

文 献

- 1) 坪井敏純, 山口 郁. 異年齢保育の中の子どもたち. 鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報 2005; 21: 1-10.
- 2) 天野美和子. 幼稚園・保育園における幼児と中学生との“ふれ合い体験活動”を通しての幼児側の経験. 日本家庭科教育学会誌 2014; 57 (3): 196-207.
- 3) 岡野雅子, 伊藤葉子, 倉持清美, 他. 家庭科の幼児とのふれ合い体験と保育施設での職場体験学習の効

果の比較. 日本家庭科教育学会誌 2011; 54 (1): 31-39.

- 4) 鎌野育代. 家庭科の保育体験学習における中学生の「幼児との関係性」の変容. 日本家庭科教育学会誌 2014; 56 (4): 203-211.
- 5) ピーター・グレイ著. 吉田新一郎訳. 遊びが学びに欠かせないわけ—自立した学び手を育てる—. 東京: 築地書館, 2018: 237-267.
- 6) 伊藤 優, 山本奈美, 伊藤圭子. 中学校家庭科の「幼児との触れ合い体験学習」における教師の危険意識に関する検討. 就実論叢 2017; 47: 123-129.
- 7) 掛札逸美. 乳幼児の事故予防—保育者のためのリスク・マネジメント—. 東京: ぎょうせい, 2012.
- 8) 田中哲郎. 保育園における事故防止と安全管理. 東京: 日本小児医事出版社, 2011.
- 9) 野田 舞, 山田真紀. 園庭遊具の遊びの価値と安全性を高める方法についての実証的研究—ハザードとリスクの概念を中心に—. 保育学研究 2018; 56 (2): 39-50.
- 10) 増田まゆみ. 平成22年度児童関連サービス調査研究等事業報告書保育所実習指導と保育士のキャリアアップ—保育所と養成校の協働による実習指導ガイドラインの作成—. こども未来財団, 2011.
- 11) 澤津まり子, 鎌田雅史. 実習施設と保育士養成校の協働による保育実習（保育所）の実践—実習園の意識調査を手がかりにして—. 就実教育実践研究 2014; 7: 83-97.
- 12) 清水裕士. フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究 2016; 1: 59-73.
- 13) 堀 啓造. 因子分析における因子数決定法—平行分析を中心として—. 香川大学経済論叢 2005; 77: 35-70.

〔Summary〕

Many nursery schools and kindergartens have implemented the Fureai-Taiken, an internship program designed to facilitate teenagers' contact experiences with young children. It would seem to be beneficial for both the children and the teenagers to communicate with people at different formative stages; however, teenagers may pose an unexpected hazard to children because of

insufficient knowledge, skills, or experience to safely communicate. This study focused on the Fureai-Taiken program as a part of the home economics curriculum at junior high schools. We investigated preschool teachers' opinions and safety awareness of the Fureai-Taiken programs, in order to help prevent accidents. We conducted a postal survey of nursery schools and kindergartens throughout Japan ; 806 preschool teachers responded with the prior instructions that junior high school students need to receive before the combined activities and the degree of the risk from the junior high school students' behaviors during the activities. The teachers primarily wanted teenagers to understand essentials, such as attitude, manners, habits, and

other basic knowledge, before communicating with the children. In the infant classes and multiage classrooms, teachers gave more attention to the safety of the junior high school students' behaviors. Based on these results, to ensure a safe environment, preschool teachers need to call for consideration from visitors, in line with the characteristics of the children in their classes. Closer information exchange is needed, especially when visitors are unaccustomed to communicating with young children.

[Key words]

safety awareness, preschool, injury prevention, young children, Fureai-Taiken program